

県内ワイド

情報のあて先は h

元気よ、届け

日赤県支部・被災地便り



日赤県支部
総務課
長
山本裕行さん

東日本大震災の発生から一ヶ月がたつた。しかし原発事故は収束が見えず、大きな余震も続き、被災地の苦闘はまだまだ続く。地震発生直後から現地に医療救護班を派遣し続けている日赤県支部の一員として自身も現地で被災者支援活動に携わる山本裕行総務課長(四〇)に、被災地の様子などを随時、伝えてもらう。

三月十一日午後二時 市。太平洋から少し奥 市立第一中学校。そこ四十六分、三陸沖を震 まつた、人口約二万三千にわれわれは発災翌源とした国内観測史上 千人の町だ。一気に押 日、救護所を開設し最大のマグニチュード(M)9・0を記録した東日本大震災。そして、その後に東北地方太平洋側を襲った大津波…。日本赤十字社福井県支部では、発災の三時間後には救護班を現地に向けて出動させた。以後この一ヶ月間に、延べ九班、八十人部から内陸にかけての救護班要員が、被災地で救護活動に当たつてきた。

われわれがこの一ヶ月間活動したのは、政 てしまつた。不安を抱えた人たちが府が「壊滅状態」とみ その高台に位置す 救護所目指してやつて いる岩手県陸前高田 る、同市高田町鳴石の 来た。

発生3時間後には出動

陸前高田へ



分かった。

多くの人が今も避難生活を余儀なくされ、

の支度をしていた。そこにたどり着くのも大変だった。車両の倒壊した建物に阻まれ、仕方なく自衛隊員の案内で徒歩で登った。たどり着くまでの苦しさは、火葬場の避難所で待つ被災者の喜ぶ顔で吹き飛んだ。

「現地の人たちは深い悲しみを押し殺し、前向きに生きている。東北の方々の強さ、心のつながりを学びました」。帰還した看護師の声だ。

道路をがれきでふさがれ、自衛隊員の先導により徒步で避難所を目指す人々も多い。原子力発電所の今後も予断を許さず、一步間違えれば「復興」という言葉も使えないくなるかもしれない

い状況だ。こんな時だからこそ、私たち赤十字は職員、ボランティア、関係者皆で手を取り合い、一丸となつて

(同市高田町太田)だ。市では当初、ここにさんの遺体が運び込まれ、自衛隊員の先導により徒步で避難所を目指す人々も多い。原子力発電所の今後も予断を許さず、一步間違えれば「復興」という言葉も使えないくなるかもしれない

い状況だ。こんな時だからこそ、私たち赤十字は職員、ボランティア、関係者皆で手を取り合い、一丸となつて

し寄せた津波は、海岸た。暖房もない体育館には当初千二百人もが避難し、夜は肩を寄せ合いかながら寒さをしのいでいた。さらに、こいつは毎日、たくばかり百人。その中に、「もう死にたい」と、市内の巡回診療にも出掛けた。市が把握しておらず、想像もしていなかる。でも被災者たちは笑顔を絶やさないよ

る。彼らは、まだ生きている。でも被災者たちは笑顔を絶やさないよ

る。彼らは、まだ生きている。でも被災者たちは笑顔を絶やさないよ

る。彼らは、まだ生きている。